

[追悼文]

菊地昌典先生の人と学問

菊地昌典先生

藤本和貴夫

菊地昌典先生が国立国会図書館から東大に移られ、国際関係論の大学院生の指導を始められたのは1967年のことであったように思う。その年の4月、修士課程に入った私は、先生に指導教官をお願いしようと何度か研究室に足を運んだが、出張中とのことでお会いできなかった。当時、国際関係論の助手をしていた木村英亮さん（現横浜国大）が、4月後半の書類提出期限内に菊地さんが中国から帰ってくるという保証はないから、他の先生に指導教官をたのんだらどうかと心配してくれたのを覚えている。

先生は、その前年に、日本における本格的なスターリン時代研究の記念碑的著作となった『歴史としてのスターリン時代』を盛田書店から出版されたばかりであり、国外への出張ばかりか、日常生活もはたから見ているだけでも猛烈な忙しさであった。その上、授業の後、ほとんど毎日都心のどこかで会合があった。渋谷

まで一緒に行くと、必ず駅の売店で夕刊を2、3紙買って、立ったまま見出しを眺められるのが習慣のようになっていた。

相当痛んだかばんの中には、読みかけの本がさらに何冊か入っていた。その頃からだったと思うが、新聞の書評委員もされていたのである。そのため、研究室でも来客のない時は机の前にはではなく、必ず応接セットの椅子に本を片手に座っているといった姿ばかりが印象に残っている。

とはいえ日常の生活のスタイルが活字一辺倒であったわけではない。授業の時も含めて何度も聞かされたのは、農学部の学生時代の恩師である古島敏雄氏につれられて行った農村調査の体験である。長野県などで一村全体が破棄され、廃村となった村を訪れた原体験は、中国問題への関心とも結びついていつまでも心から離れない原点ではなかったか。廃村の原因が戦前の村全体の満州への移住によるものであり、そこには再び故郷に帰りつかなかった人々の運命に対する深い思いがあったように思われる。

その後、何度も先生と一緒に旅行した経験を思い出してみると、そこには、訪問した先々で人々との出会いを求めるといった言葉だけでは言い表せない何かがあった。それは、19世紀のロシアで、人民との出会いを求めて農村に入っていった若い知識人の「ブ・ナロード」の運動を思い出させるような精神的な真剣さである。自ら実践することが後進に対する先達の義務であると考えておられたふしもあるが、先生の行動の多くの部分を規制する原理でもあったように思える。

ロシアについて研究しようとする者は石光真清の自伝4部作を読まなければ駄目だというのも口癖であった。立場は異なるが、ロシアのウラジオストーク、ブラゴベシチェンスク、中国の黒河、

ハルピンなどを拠点に活動し、日本人の娼婦をも含め、そこに生活する人々の目線からも物事を見ることのできた軍人石光の行動に対する共感があったように思える。日本のロシア研究は、多くの在野の先達の研究に負うところが大きいという思いが強かった。日本の社会主義運動の草分けである晩年の荒畑寒村さんへの献身的な奉仕もそのことをぬきにしては考えられない。もっとも、大正期文化人の寒村さんからは、遊びごころや上方文化といったものも吸収されたようである。

1980年と1988年の2度、先生を団長とする日中友好学術交流協議会の訪中団に入れていただいた。2度目は秘書長の役目を仰せつかったが、2度とも北京や上海以外に旧満州にあたるハルピン、瀋陽、長春などをまわった。「菊地一座」だとの冗談がでるほど各地でソ連と社会主義に関する講演や議論をして歩いた。この点については帰国後さまざまな報告文が書かれている。しかし、どの報告にも書かれていないが、講演などに劣らず真剣に取り組んだのが買い物であった。先生から叱咤激励されて、われわれは、各地のみやげもの店で、すずり、陶器、筆、印章などの買い物に努めた。先生の目利きで買った清朝の小さなつぼまである。学者だとはいえ、金持ちの日本人が、必死に社会主義的市場経済に向かって努力している中国にお金を落とさないのはサービス精神に欠け、申しわけがないというのが理屈であった。少々強引ではあったが、大学のアカデミズムに身を置いた研究者としてのひとりよがりになる危険性に対する自省のあらわれであったのかもしれない。

歴史研究と並行して進められた歴史文学論にもそのような態度が見られる。松本清張と司馬遼太郎を比較した文章があるが、地面をほうような清張の文学を評価しても、上空から眺めるという

司馬の言葉自体に反発して、司馬文学には批判的であった。そして司馬の描く『坂の上の雲』の影響力の前には、日露戦争に関するロシア史の専門家の書いたものの影のうすさを何度も問題にされたことを思い出す。

そのような文学論のゆきついた先が、自らトロツキーの伝記を執筆することであったのではないか。1981年に書かれた『トロツキー』伝は、自らのメキシコへの旅行から始められている。また前書きで、伝記の執筆が「貴重で楽しい経験であった」と書かれている。

菊地先生と結び付いているのは旅である。現場を歩きまわるといふこと、体験を重視すること、出会いの大切さを何度も教えられた。さらに、研究者の目とともにジャーナリストの目ももっておられた。

いまもさらなる旅を続けておられるのではないか、と時々ふと思うことがある。 (ふじもと・わきお 大阪大学大学院言語文化研究科教授)

菊地昌典先生を偲んで

《歴史の主体でもあった歴史家の時代》の終わり

塩川 伸明

菊地昌典先生の訃報を聞いて最初に思ったのは、歴史家が歴史の主体でもあるような時代の終わりということだった（以下、故人を客観化するため、非礼かもしれないが、敬称を略させていただくことにする）。

最初の単行本『ロシア農奴解放の研究』（1964年）のはしがきで、

菊地は、元来日本農業・畜産史を学んでいたにもかかわらず、「これから本格的な農業経済研究者としての道を歩むという段になって、ロシア史研究へ全精力を傾注することを深く心に決め、一切の関係蔵書をひそかに、しかも徹底的に処分してしまい、畜産経済にたいする関心を自らの手で断ちきってしまった」と書いている。この文章は、今日の若い研究者にはほとんど理解不能だろう。19世紀半ばのロシア農奴解放研究はロシア革命研究の「序曲」であり、そしてロシア革命研究こそは日本社会変革の鍵を握ると考えられていた、そうした時代があったのである（日本農村研究からロシア・ソ連研究へという軌跡について、後年のエッセイ「若い日の私」〔『歴史と想像力』筑摩書房、1988年所収）に簡単な説明がある。

第2の著作『歴史としてのスターリン時代』（私がおはじめて接した菊地の著書でもある）のはしがきには、次のような個所がある。

「いま回想するのだが、私がスターリンの大粛清の発生原因を歴史的に分析しようと志したとき、ロシア研究のある元老は、親切に忠告して下さり、このようなテーマをえらぶことがいかに不利となり、危険であるかを懇々とさとされたのであった。自称左翼は、かつてあれほどスターリン讃仰の言葉を大衆にむかって吐きつづけてきたにもかかわらず、スターリン批判後、たちまち底知れぬ沈黙のなかに埋没し、いわば沈黙によって責任をまぬがれ、スターリンの自然抹殺をはかろうとしていた。そして、右翼は、さまざまな流言をまぜた血の恐怖、赤色テロルのスターリン時代史を街頭に氾濫させていた」。

これを今日の時点で読むなら、「昔はそんな状況があったのか」と驚いたり、あるいは逆に、「いや、いまでも状況はそれほど変わっ

ていないのではないか」と疑問を出したり、といった様々な反応がありうる。だが、ここで注目したいのは、この本が刊行されたのが1966年、つまりスターリン批判からわずか10年しか経過していない時点だったということである。

「十年一昔」というが、10年という月日は、ある事件を歴史として振り返らせるのに十分な時間ではない。そのことは、いまから10年前の1988-89年（ペレストロイカの急進化から冷戦の終焉へと至る時期）を思い起こしてみればすぐ分かる。あまりにも近い過去は、もはや現状分析の対象ではない一方、未だ歴史研究の対象でもないということで、意識から脱落しがちであり、もう少し時間が経ってからようやく歴史としての取り組みが始まるというのが一般的傾向である。そのことを思えば、スターリン批判からわずか10年後に、そして当のスターリン時代からも20-30年しか隔たっていない時期に早くも「歴史として」スターリン時代を描こうとした菊地の試みは、ドンキホーテ的ともいいたいほどの果敢なものだった。そしてまさにそのようなドンキホーテ的な企図を敢えて試みさせたのは、歴史の観察者ではなく歴史を形成する主体たらんとする強烈な意志だったのではないかというのが私の推察である。

先に言及した『歴史としてのスターリン時代』のはしがきには、「スターリン時代を徹底的に研究することは、いやしくも変革を志す者にとって、不可避の前提であり条件である。もしこの研究をおこたる者は、みずから、即刻、前衛の座を去るべきである」という文章もある。「いやしくも変革を志す者」とか「前衛」といった言葉も、いまでは一抹のノスタルジーをかきたてるものだが、当時あっては自然な言葉として書きつけられている。それはさ

ておき、「変革を志す」だけであれば、研究者になどならず、直接に革命家の道を選べばよかったかもしれない。あるいは、研究者になるにしても、「人民に奉仕する」というスローガンのもとに、特定政党の方針に沿ったプロパガンダ的研究を推進するという道もなくはなかった。そうではなくて、「歴史として」ロシア革命やスターリン時代を解明するという姿勢をとることの背後には、冷徹な社会科学的究明こそが変革の情熱を支えるはずだという確信があったのだろう。

今日のわれわれは、そうした冷徹さと情熱との幸福な結合をもうはや信じることのできない地点に生きている。そのような地点から菊地の仕事を振り返るなら、スターリン批判からわずか10年後に、スターリン時代を、情動的な反撥や心情的弁護論としてではなく、「歴史として」描き出そうという壮大な試みは、まさしくその壮大さのために空回りせざるを得なかったということになる。反骨精神をモットーとしつづけた菊地の精神にならって敢えて不遜な暴言を吐くなら、『歴史としてのスターリン時代』は歴史研究の書としては失敗作である。だが、まさにそのような野心的失敗作を書かずにおれなかったという姿勢そのものが、ある一つの時代の貴重な証言となっている。それを私は「歴史家が歴史の主体でもあった時代」というふうに考えてみたい。菊地はそのような時代のほとんど最後の歴史家だった。そう考えるなら、この本は、それ自体がある時代の精神状況を伝える歴史的証言、一つの歴史資料としての価値をもっている。

不肖の弟子である私は、ソ連史の内容的把握については菊地の仕事に逆らい続けてきた。だが、まさにそのようにして師に反逆する反骨精神を良しとする姿勢は、ほかならぬ菊地から学んだも

のである。そして、「歴史家が歴史の主体でもあった時代」が取り返しがたく過去のものとなろうとしている今日、その時代の末期を垣間見た人間として、ある種の郷愁を覚えずにはいられない。歴史研究がますます「厳密な社会科学」への接近を示している今日、あのようなドンキホーテ的な作品は二度と現われることはないだろう。そうであればこそますます、それは一つの時代の記念碑としての意味をもつように思われてならない。

(しおかわ・のぶあき 東京大学大学院法学政治研究科・法学部教授)

「菊地昌典文庫」について

高橋 清治

先生が亡くなられてはや一年有余、このところ先生の御蔵書と向き合う時間が少なくない。広範な御蔵書のうち主にロシア史関係の文献が、御遺族の御厚意で私の所属する東京外国語大学図書館に御寄贈いただけることになったからである。

書物にまつわる先生の思い出と、御寄贈の文庫について記しておきたい。

駒場の教養学科ロシア分科に進んで先生にお会いしたのが1960年代末、ロシア史を専攻して大学院に入ったのが70年代初めである。書物について当時大学院生の間でよく話になったのは、ロシア関係の文献が日本の各種の図書館にきわめて不十分にしか所蔵されていないこと、非系統的に分散していること等への嘆きであった。事はロシア認識、ロシア研究を然るべく位置づけてこなかったこの国の歴史と現在にかかわっている。さらに「若き世代」が

とりわけ困ったのは、そもそも露語文献というものは、新本の研究書でさえ、必要になった時に注文して入手しうるものではなく、出版された時、目にした時に買うしかない、という固有の事情にもよる。

先生は、資料の独占、私物化の悪弊を強く批判され、資料の公開をつねづね強調されていた。学部学生の頃から先生の御蔵書を広く利用させていただいた者にとっては、研究室備付けの色あせた図書貸出ノートの記憶は鮮やかである。資料公開については、先生の国会図書館時代以来の友人である庄野新氏も思い出（『ロシア史研究』第61号）で触れておられる（なお、ロシア研究にたずさわる者の間でも露語文献の状況についての原イメージは、当然にも、それぞれの世代でかなり違おうだろう。格段によくなってきたことは間違いないが、依然として問題は大きい）。

「ロシア関係の文献を包括的に集めるロシア研究センターがあれば」という話は、先生もよく口にされていた。より差し迫った、なかなか困難でもあった課題は、個人コレクション等の有効な保存、継承である。関係者が寄贈を申し出られても、図書館の側で受入れ態勢の不備等がネックとなってまともならず、結局受入れ先が見つからないで、みすみす貴重な文献が散逸する、そうしたことがままあった（これは、ロシア研究に限らず、広く見られる深刻な問題であり、しかも遺憾ながら、状況はますます厳しくなっている。寄贈を一切受け入れない図書館も多く、はなはだ無礼な条件をつける例も漏れ聞く）。

そういう中で1972年に先生が実現されたのが東京大学教養学部教養学科図書室の「黒田乙吉文庫」である。黒田氏は、大阪毎日新聞特派員としてモスクワで1917年の革命を実見、報道された方

であり、ロシア関係の貴重な文献を所蔵されていた。先生が種々の関門を、時に憤慨しつつ、クリアし寄贈受入れまでもっていかれたのを、当時大学院生であった私は見ているし、この文献の引取りから整理まで直接にたずさわる機会があった。整理の進め方をめぐって先生と激しい議論となったこともあったが、黒田文庫をめぐる事どもは先生とのなつかしい思い出である。

先生のロシア関係の御蔵書の寄贈先について御遺族から御相談を受けたのは、先生を偲ぶ会を催させていただきたいと大学院での教え子数名で御挨拶にうかがった昨年8月のことであった。

「本は寄贈、もしくは売却も可」と先生は書き遺されていた。「寄贈は遺志であり、遺族としては、その希望を尊重し、寄贈先を捜し（できれば菊地昌典コレクションとしての一括保存が理想であるが）、どうしてもそれが見つからない場合にのみ売却も考えたい」とのお話であった。後にうかがったところによると、亡くなられる二年ほど前に御長女ふみ子さんとの間で蔵書のことが話題になり、「本は後始末が大変だぞ」としみじみおっしゃっていたそうである。

その日は私も大学での受入れの可能性を追求する旨約して辞したが、ある種の「巡り合せ」といったものを感じざるをえなかった。

9月に学長室に出向いて、中嶋学長に御遺族の御意向を伝え、整理方法等についても相談し、大学で御寄贈をお受けする方針が決まった。年内に御自宅と敬愛大学研究室からの書籍の引取り、図書館への搬入を行ない、年明けから、院生、学生の協力をえて、図書受入れの基礎的作業と書誌的データの輸入を集中的に行なった。年度末時点での入力分は約5,500冊（うち露語図書、約4,000冊）

であり、今後の分を含めて6,000冊規模の文庫となろう。現在そのデータベースの監修と最終的な分類のためのチェックを進めている。

東京外国語大学はこの両三年に府中への移転を予定している。最初の日には御遺族にお話したように、「菊地昌典文庫」は移転後の新図書館で開設、公開される。ロシア史関係を中心とするこの文庫が最良の形で開設され有効に利用されるよう事を進めてまいりたい。

なお、これと並んで、先生の教え子の楊合林さんの尽力で御蔵書のうち日本関係の約4,000冊の和書が中国の遼寧師範大学（大連市）に寄贈された。日中間の相互理解の深化に資するであろう中国の「菊地昌典文庫」と我々の文庫は兄弟ということになる。こういう形で先生の貴重な御蔵書が広く継承されることは、先生にふさわしいように思われるし、資料公開を説いておられた先生の御遺志にかなうことでもあろう。

あらためて御冥福をお祈りして、筆を擱く。

（たかはし・せいじ 東京外国語大学教授）

不肖の弟子が先生から学んだこと

袴田 茂樹

私たちが社会の中で生きて行く時、心の内面の最も感じやすい部分、傷つきやすい部分を正面に出して生きるということはしない。そのような生き方は、なるほど、人間として誠意のある生き方かもしれない。しかしそんなに無防備な形で自らを外に晒すと、

しばしばその人自身が傷つき、血や涙を流すはめになってしまうからだ。そして、それは決してスマートな生き方とも見えないからだ。したがって、私たちは傷つきやすい部分は正面に出さず、うまく卵の殻に包んで生きるという「生活の知恵」を身につけている。

菊地先生に私が心を打たれるのは、先生はどのような時でも、このような「要領のいい生き方」とは無縁だったということだ。菊地先生は、一番感じやすい部分をいつも正面に出して生きてこられた。日頃の日常生活でも、また学問の世界でもそうであった。学問の記述は、歴史や社会を語り論じる時にも、しばしば無人称の客観的主義の形をとる。それは、じつは認識の客観性のためだけではなく、書き手が自己を防御する手段でもある。歴史や社会を見る時、それを見る人の感情や気持ちを離れた客観認識などというものはあり得ないのであるが、われわれはそのような個人の内面世界を隠して、「客観的記述」に逃避してきた。

菊地先生が書かれたスターリン主義の歴史分析には、先生の一人の人間としての生々しい怒りの感情がこめられている。中国の文化大革命への先生の思い入れは、やはりソ連的な社会主義への失望と、その非人間的な官僚主義に対する怒りと批判の表現でもあった。先生のこの文化大革命や毛沢東主義に対する認識の間違いを、客観的に批判することは易しいであろう。しかし、私は先生のこのような決してスマートとは言えない生き方自体に、そして歴史や社会を見るその温かい人間性に、最大限の敬意を払いたいと思う。

私が個人的に菊地先生と初めてお会いしたのは、1970年頃だったと思う。当時は私がモスクワの大学院に留学している時で、一

時帰国して、ソ連研究を日本で続ける道について相談に乗って頂いた。先生は初対面の私に親切なアドバイスを与えて下さった。1972年に帰国したとき、東大の大学院博士課程に「拾って」下さったのも菊地先生であった。私はもともとソ連研究者になりたいと思って学問に励んできたわけではない。たまたまロシアに留学する機会を得、そこで感じたこと考えたことを、まったく自己流のスタイルで表現してきたというのが私のロシア研究であった。このようにオーソドックスなアカデミズムのスタイルからは外れている私を、自らの研究室に入れて下さったのも、先生のその人間性ゆえであったと私は思っている。

私が妻と菊地先生のことを話す時、生前の頃から二人が常に感動しながら思い出していたことがある。それは20年近く前、私がまだ貧しい大学院生で、長女が3、4歳の頃であった。たしか、私たちが磯子の県営住宅に住んでいた時、自宅に先生をお招きした時だったと思う。帰られる時、妻や娘と一緒に先生をお送りしながら街を一緒に歩いた。その時、先生は通りがかった店で娘に帽子を、そして私たちに肉屋で肉を買って下さったのだ。ごく普通の肉であったが、その肉に込められている先生の人間的な愛情を、私も妻も心の中でむせびながら頂いたものである。

菊地先生の紹介で、私は先生が以前働いておられた国会図書館の海外事情調査室で7年間働いた。私がロシアの新聞、雑誌をきちんと読む習慣を身につけたのは、ソ連に留学していた時ではなく、この国会図書館時代であった。今日、私は何とかロシア問題の専門家として生活しているが、菊地先生との出会いがなかったら、私の生活が果たしてどうなっていたかわからないだろう。

先生にとって私は不肖の弟子であったと思う。先生の生き方に

は深い感銘を受けながらも、社会認識や文化感覚の面では私の考え方や感じ方は先生のそれとはかなり違っていた。私が書いたりしゃべったりしていることに対して、先生はいろいろ異論はあったと思うが、私に対して批判がましいことは一切言われなかった。ただ、忠告として何回か述べられたことは、しっかりとした立派な仕事をしなさいということであった。ジャーナリズムに振り回されずに、ロシア研究者として立派な仕事をせよとのアドバイスである。

忠告を受けたことを私がちゃんと果たしているとは思わない。その意味でも不肖の弟子であるが、今後もなんとか自分なりのスタイルでものを考え、それを自分なりの言葉で一人の人間として表現してゆきたいと思う。これこそが、私が菊地先生から学んだことなのであるから。

(はかまだ・しげき 青山学院大学国際政治経済学部教授)

菊地先生の思い出

横手 慎二

昔、学生のころ受けた民法の講義で、研究者には新しい問題を次々と開拓していくことに生きがいを見出すタイプと、一つの問題にこだわり続け徹底的に解明することを自己の使命と考えるタイプがいると聞いた。この区別に従えば、菊地先生は間違いなく前者のタイプであった。そもそもソ連政治という研究テーマ自体が、戦後の日本の学界においてはパイオニアの気負いなしには不可能であった。その後、スターリン時代の暗黒面を捉えようとし

て同時代の日本人という問題を発見し、さらにそこからロシア革命と日本人という問題を引き出し、その解明に多大なエネルギーを注がれた。さらに中国における文化大革命の進展に期待をかけ、社会主義の再検討という重いテーマを御自身の最大の研究課題とされた。その他にも、先生は歴史と文学の関係や柳田民俗学など、様々な問題に関心を示された。

先生のこうした研究姿勢は講義にも表れていた。70年代前半に学生時代を過ごした私は、「ソ連の政治」という授業の中で、社会主義体制のタイポロジーの問題ばかりか、シベリア出兵時の日本軍部の姿勢やスターリン時代にソ連に亡命した日本人のこと、司馬遼太郎やソルジェニーツィンの著作を題材にした歴史と文学の関わりなど、実に幅広い問題を教わった。気がついてみれば、ソ連の歴史や政治についてよりも、こうした問題について議論する先生の姿ばかりを覚えている。あるいはそれは、当時の私が社会主義に関心をもたない「新人類」であったからかもしれないが……。

授業では先生は、しばしばソ連のような社会主義国を研究する者は苦しい生活を覚悟しなければならないとか、勉強は自分でするもので、授業で習うものではないとか、家庭を持ち、子供を背負いながら原稿を書かねばならないとかといった「教訓」を口にされた。大きく眼を開いて若い学生たちをグルッと眺め回してから、こうした過激な「教訓」を垂れるのが当時の菊地先生の授業風景だった。学生たちは授業内容よりもむしろ、そうした先生の言葉を人生の先輩の教えとして歓迎していたように思う。

研究者に二つのタイプがあるとすれば、教師にも二つのタイプがある気がする。優れた見解を示す学生を誉めて、沈滞する学生を叱責することを職責と考えるタイプと、昇り調子の学生には好

きにさせて、落ち込んだ学生のことを気遣い、彼らを庇うことを以って自己の職務と考えるタイプである。この区別が成り立つとすれば、明らかに菊地先生は後者であった。先生はいわゆる落ちこぼれの学生に徹底して優しかった。私が学生時代を過ごした70年代には、まだ60年代末の大学紛争の傷痕が残っていて、大学の内外に多数の挫折経験者がいた。もちろん彼らの中には政治的立場の違いから菊地先生と全くそりの合わない者もいたが、そうではない者も多く、先生はこうした方向を失った学生に特に優しかった。このためもあって、先生の講義室と研究室には、いつも色々な専攻の多様な大学の学生が入り込んでいた。マスコミで売れっ子の先生の時間を割いてもらって議論し、自分の抱える問題を探りあてたり、進むべき方向を決めたりした学生はかなりの数に上ったはずである。しかし中には、こうした先生の姿勢を良いことに、要領よく振る舞う学生がいないわけではなかった。菊地先生は時としてそうした学生の姿勢に苛立たれたが、概して気づかない振りをしておられた。少し教師業に携われれば分かるが、20歳かそこらの学生の発言の裏側は比較的良好に見えるものである。だから今にして思えば、菊地先生はそうした学生の心根のさもしさを見通した上で、努めて見ないようにしておられたのであろう。学生の間では先生の成績評価はかなり甘いという風評が流れていた。菊地先生はそうした「批判」に一切関心を示されなかった。

私も学生時代、そして院生時代によく先生の研究室にお邪魔した。そうした中で特に覚えているのは、中国の文化大革命に対する理解の違いから先生に叱られたことである。しかし先生の態度は実にサッパリしていて、暫くしてお会いしたとき、まったくなかったかの如く振る舞われた。20も年齢の離れた者に気を遣わせ

まいという配慮だったと思う。

こうした先生とのお付き合いの中で特に思い出されるのは、ゴルバチョフの時代に当時レニングラードと呼ばれたサンクト・ペテルブルクで開かれた国連大学主催の会議に、お供の形で出席した時のことである。当時私はモスクワの日本大使館の専門調査員をしており、先生は自分の出る学術会議に加わるようにと言われたのである。そこで歴史学の状況を調べてくるという名目出張し、会議を傍聴した。会議のテーマは明治維新とロシア革命を比較するというものであったが、そこでの先生の報告は、平たく言えばロシア革命はマルクスの予言に反した革命であり、しかもレーニンとトロツキーの目指す理念を裏切った革命であったというものであった。ソ連科学アカデミー付属歴史学研究所の学問官僚たちが、こぞって菊地批判を展開したのは言うまでもない。しかし先生はこうした批判の合唱が始まるとすぐにイヤフォンを耳から外して、じっと眼をつぶっておられた。私はすぐ後ろに座って、先生はどうするのだろうと見守っていた。批判の合唱が一通り終わると、先生は壇上に上って、日本を出国する前に北朝鮮が経済的に行き詰まっているというニュースを聞いたと切り出し、続けて今や社会主義を標榜する国はすべて経済的に行き詰まりに横着していると指摘した。学問官僚が見ようとしない社会主義国の経済的現実から議論を組み立てるべきだと説いたのである。もちろん討議は噛み合わなかった。しかしそうした先生のもとに会議終了後にソ連歴史学レニングラード学派を代表するジャーキンが寄ってきて、日本の地主制度について質問した。今から考えれば、あるいはこれは誠実な学者であったジャーキンの好意を示すものであったかもしれない。しかし通訳を務めた私の能力の拙さのため

に、折角の会話もさして広がることなく終わった。

モスクワへの帰りは先生も私も「赤い矢」と呼ばれる寝台列車を利用することになり、先生は同じコンパートメントに乗るよう言われた。中には二人以外に誰もいなかったように思う。ともかく私はそこで先生と窓外に流れる暗い景色を眺めながら、ベレストロイカの状態や社会主義の将来について長く話す機会を得た。先生は会議の内容についてまったく触れなかった。またゴルバチョフの改革についてもさして興味を示されなかった。しかし私が何気なく、環境問題などによって人々が経済を再び管理下に置こうとする時代が来れば別だが、今や「社会主義」には未来はないと思うと断定的に言うと、先生は肯きつつ反論された。いや資本主義だって多くの問題を抱えていて、このまま進むとは思えないというのが先生の意見だった。先生はゴルバチョフも含めてソ連に何も期待していなかったが、それとは別に、「社会主義」という理念を通して自他の有り様を批判的に見る視点を保持していなければならないと考えて居られたようであった。長いこと身の様々なことに配慮していただきながら、私は菊地先生のこうした「社会主義」観を知らなかったので、意外な気持ちで受けとめた。先生にとって「社会主義」とは、人の行動を律するきわめて倫理的意味を含むものであったのではなからうか。

(よこて・しんじ 慶応義塾大学法学部教授)

菊地昌典さんを偲んで

蠟山 道雄

私にとっての菊地さんは、掛け替えのない同志であった。「同志」という言葉は、左翼的イデオロギーのにおいがして、今日ではあまり使われないが、他に共通点のほとんどない菊地さんと私は、1970年から27年間、日中関係の正常化と学術交流促進の運動に、手を携えて関わってきた紛れもない同志だった。

その菊地さん——私より二つ年下の菊地さん——が、突然逝ってしまうなどということは、未だもって信じられない悲しい出来事だった。昨1997年の3月、私は菊地さんから、胃癌の手術のため入院する必要があること、そして、入院先として杉並区の某病院を選んだということを告げられた時、それは良い選択だと、肯定的に応えたことを、私は今でも大変悔やんでいる。なぜならば、菊地さんはその病院に入院して手術を受け、その結果があのようなことになってしまったからである。若し菊地さんが、最初に病名と手術の必要性を告げられた、都心のある大病院への入院を忌避しなかったなら、結果は違っていた可能性が大いにあるからである。しかし、それは後の祭りにすぎない。

菊地さんは、多分多くの日本の知識人——というよりは世界中の理想主義的傾向をもった知識人たち——がそうであったように、マルクスの思想に惹かれて社会主義の勉強を始めたのは当然のことであったように思える。菊地さんは、社会問題に強い関心を持ち、正義感が強く、誠実な人柄の人だったからである。

菊地さんは、最初の著作『ロシア農奴解放の研究』を1964年に

世に問うて以来、社会主義に関して沢山の立派な業績を残された。しかし、思想的立場が違い、専門研究分野の違う私は、これらの業績を正しく評価する立場にないし、また、「偲ぶ」ためにそうすることが必要だとも思われない。

私と菊地さんが同志として関わった運動の1970年当時の目標は、1945年の日本の敗戦以来、国交のなかった日中両国の関係正常化を促進することであり、その手段として、公明党の竹入義勝委員長（当時）の強力な支援を受けて、日中国交正常化国民協議会という団体が組織された。党利党略や思想的立場を超えて日中国交正常化を必要と考える学者・知識人を結集した運動体であったが、その初期目標は約2年後の1972年9月に達成され、さらに1978年8月には日中平和友好条約が結ばれたため、日中国交正常化国民協議会は目標を転換し、その呼称も「日中友好学術交流協議会」に変わった。この団体は、以前からの提携先である中日友好協会と、あらたに提携先となった中国社会科学院との間で、毎年訪中団、訪日団を交換し、学術交流、学術協力を通じてよりよい日中関係の発展に貢献したい、とするものであった。

しかし、こうして順調に発展してきた日中学術交流事業も、残念なことに、1989年6月に起こった「天安門事件」によって頓挫してしまった。それは、日中友好学術交流協議会が、3名の代表世話人——菊地昌典、西川潤、蟬山道雄——の名に於いて中国共産党中央の決定に基づく人民解放軍による学生および一般市民に対する弾圧を批判する声明を公表したからである。われわれとしては、あのような独裁政治的統制の下では、何にもまして自由な意見表明が大前提である学術交流は不可能である、と判断したのである。

しかし、菊地さんはもちろん、西川さんも私も、中国および日中関係の将来に対する関心を失ってしまったわけではない。われわれは当面、関心の対象を、日本の社会科学系の大学院で学んでいる中国人留学生に対する奨学金支給事業へと移したのである。

1987年に財団法人アジア教育文化交流協会という財団が設立され、私が理事長、菊地さんには理事になっていただいた。そしてそれから10年間、毎月第三土曜日の午後1時から、現在は西新橋にある財団の事務所に奨学生たちに集まってもらい、出来れば菊地さんと私が同席し、場合によってはやはり理事の西川さんに応援を頼み、奨学金を一人一人に手渡すと同時に、彼らの日常生活の悩みや大学院での勉強についてのいろいろな問題について相談に乗りながら、話を交わす、という仕事を続けて来たのである。

このような四半世紀以上にわたる付き合いを通して、私は菊地さんと5回一緒に中国を旅行した。訪問先は北京や上海のほか、西藏、新疆ウイグル自治区、河南省、陝西省、山東省青島、四川省、福建省、広東省などが含まれる。5回の、それぞれ2、3週間の旅行を通じて寝起きを共にしたことで、私の菊地昌典観は出来上がったといえる。彼は本当に誠実なヒューマニストだった。

菊地さんが亡くなった時、幾つかの新聞は菊地さんが中国の文化大革命の理論的指導者の一人であった張春橋の論文「ブルジョア階級に対する全面的独裁について」を肯定的に評価したことをあげ、あたかも菊地さんが極左主義であったかのような印象を与えた。確かに菊地さんは張春橋論文を評価した。しかし、それは張春橋の、権力の腐敗に対する危惧に対して同感したからであり、文化大革命の発動とその結果を肯定していたのではない。菊地さんの心情はむしろその逆であった。

それは1985年に、菊地さんと、当時日本国際政治学会の理事長をしておられた川田侃さんと一緒に、中国共産党中央党学校の招待を受けて中国を訪問した時の、忘れられない思い出の場面である。中央党学校の講堂で、川田、私、菊地の順で党学校の幹部教員と学生に対してそれぞれ講義をしたのであるが、その時菊地さんは、一党独裁下の、競争のない、いわゆる「大釜飯」的（親方日の丸的）政治経済運営が、如何に社会と経済を駄目にするか、という話を順々と説いたのである。1985年といえば、中国の経済開放路線が動き出してからまだ日も浅い頃であったが、教授連が渋い顔をしていたのに対して、学生たちが目を爛々と輝かせて菊地さんの話に聞き入っている様は本当に印象的であった。

菊地さんはそのような、常に物事の真実に迫り、弱い立場にある人々に対する思いやりを込めながら、自分が正しいと思ったことを敢然と主張し、行動する人だった。私は、そのような菊地さんが大好きだった。そして今、私たちはそのような、掛け替えのない菊地さんを失ってしまったのである。今となって本当に残念ながら、天国から我々を励まして下さい、と祈る他はない。私も、27年間菊地さんと一緒にやってきた仕事を、体の続く限り続ける、と誓いながら。

（ろうやま・みちお 上智大学国際関係研究所教授）

菊地先生と骨董

加茂 雄三

亡くなられた菊地先生と骨董とのつながりと言ってもピンとくる人はあまり居ないであろう。だがじつは、先生は大変な骨董好

きで、暇があれば骨董市や知り合いの骨董店に足を運んで、何か面白いもの、掘出し物がないかと精神を集中していたのである。私もじつを言うと先生のご薫陶で骨董に興味を持つようになり、先生のお供で骨董市や骨董店へよくご一緒させていただいた。

ところで一つ注を記しておく必要があるのだが、ここで言う所の骨董とは、例えば東京の青山通りの骨董店で見る事が出来るような、何十万、何百万という近づき難い代物を指しているのではない。先生も私も、いわゆる一流骨董店のあの雰囲気は値段も含めて大嫌いであった。あるとき、先生ご夫妻と私も夫婦が、骨董を見せて下さるといふことである資産家の家に呼ばれたことがあった。お邪魔してみると、何やら高価そうな古い仏像や陶磁器や掛軸などが、部屋一杯に置かれていて、襖にも誰やらが書いた由緒有り気な紙本がべたべたと張りつけられていた。覗き込んで見ると、なんと木戸孝允とか山縣有朋の署名があるではないか。すっかり気おくれして「本物ですか」などと冗談半分に尋ねることすら出来ぬままその別世界をあとにしたのであった。それらが全部本物であったのかどうかの真偽は明らかではない。善意に解釈して本物であったとみなして、私たち二人は顔を見合わせ苦笑いしながら首を振り振り「やー、ちょっとね。ああいう趣味じゃないなあ」などと言ったものである。

大袈裟に聞えるかも知れないが、骨董について私たちはつねになんらかの哲学を持とうとしていた。先生は骨董に関する本をよく読んでおられて、加茂さんはもう何々を読みましたか、などとよく聞かれたものである。どこから仕入れた話なのか知らないが、妻子に食うや食わずの生活をさせながら全財産を骨董に注ぎ込んだある収集家の話に感動している様子であった。「そのくらいやら

ないと本物ではないのかなあ」などと話を向けられて返事に窮したことがある。

私たちに共通している骨董価値観、ないしは骨董収集観みたいなものがあった。それは、決して高価な骨董を求めるべきではない、せいぜいその上限は1万から2万円程度にすべきである、というものである。私はその信念を例外なくとは言えぬまでも大体守っていたし、先生も私の知る限り、これまた例外なくとは言えぬまでも守っておられたようである。骨董品もお金さえあれば、大体何でも手に入ることは自明である。先ほどの資産家の収集品がそのことを如実に示している。しかし、実際のところ何十万円もするものでもすこしも良いなあと思わぬものもあるし、割れたり、欠けたり、剥げたりしたもので、数百円もしくは数千円のもので、じつに良いなあと思うものもある。つまり、骨董品には、市価とか相場で表わされている価値と、自分自身の感じで定まる価値があるのである。私たちは後者こそ大事であるという点で一致していた。もっとも私の場合は、家内が数万円以上のものは買うべからず、そういうものは本来個人ではなくて公共の博物館のような所が所蔵すべきである、という明快な考えを持っているため、良い、良くないの判断はある市価の枠組の中でしか為さざるをえないのである。話はややそれるが、最近テレビで「お宝探し」とうたって、骨董品の値ぶみを行なう番組があるが、あすこに出てくる鑑定師たちは、一見して骨董について詳しいようであるが、なにか見ている可愛想な気がする。その骨董品が持つ本当の良さや価値については何ら独自の鑑識眼を示すことなく、ただただ、誰の作だからとかいつの時代のものだからといって値段をつけているだけなのである。もっともそういうコマーシャルゲームなの

であろう。

菊地先生が好んだのは、中国の骨董、とくに壺や皿や人形などの陶磁器、古硯、印材であった。私たちは、学術訪中団のメンバーとして何度か中国にご一緒したことがあるが、先生はいつもタイトなスケジュールの合間を見ては骨董店を探し回っておられた。決して高価なものではないが、味のある感心するものを求めておられた。東京では赤坂の雪江堂によく出入りし、重い壺などを車も使わずに家に運んでこられたそうである。古硯は、お相撲さんの下駄のような大きなものから、小さくて変った形をしたものまで色々とおられて、こっそり求めてきては書斎の片隅に集めておられた。「女房には内緒なんですよ」といたずらっぽく笑いながら見せて下さったが、あとで奥様に伺ったら全部知っていたとのことである。

1996年の夏に、返還前の香港を見ておきたいといっしょにご一緒に香港を訪れたときが、先生と骨董店めぐりをやった最後となってしまった。先生も私と同様、骨董自体さることながら、骨董屋の人物像にも大変興味を持っていて、骨董市の帰りなど二人でよく骨董屋のことをあれこれ話題にしたものである。浜松から来ている骨董屋は初めは純情であったが、いまはすっかりすれからしになってしまったとか、はては、骨董屋の奥さんは意外と美人が多いとかという話である。骨董の値段を値切るうえでは、二人とも甲乙つけがたいと言えたが、これは、1980年にたまたまお互いにメキシコに滞在していたとき、メキシコの市場でものを買うときに身につけた共通の訓練の賜物であった。骨董屋といえば、先ほど述べた香港での骨董屋めぐりのとき、二人とも「大変な掘出しものだ」と言って大騒ぎしながら求めた壺が、ホテルに戻って色々

と検討した結果、大量に作られた贋作ではないかという結論に達した。帰りの機中で先生は、「あんな誠実そうな顔付きをした骨董屋が嘘をつくなんて僕には考えられないですね」と言ってしきりに首をひねっておられたが、それはいかにも先生らしかった。合掌。

(かも・ゆうぞう 青山学院大学副学長／文学部教授)

菊地昌典君との交友

山極 晃

菊地君と私は1942年4月、府立九中（現都立北園高校）に入学した。しかも同じクラスだった。だが一緒に学んだ期間はそう長くはない。私は一年が終わると軍の学校に入り、敗戦後45年9月に九中に戻ったが、その半年後菊地君は宇都宮高等農林に進学した。戦後の九中時代、地下足袋が彼のトレードマークであった。私たちは気の合う同じグループに属しており、卒業後も毎年集まったり、海や山へ遊びに行ったりした。

当時高等農林のような専門学校から東大へ進む人は稀であったが、菊地君は持ち前の頑張りで努力し、49年旧制の東大農学部に進学した。病気で遅れた私は同年新制の東大教養学部に入學した。しかしせっかく苦勞して入った東大畜産学科に彼はまもなく幻滅した。農村の現実とあまりに乖離していると思ったようだ。他方社会変革への関心を強めていった。そして学部を終えると、農業経済の大学院に進んだ。社会科学の勉強に力を入れ、ロシア語を学び、ロシア史の研究に進んだ。またこの頃何度か農村調査に行っており、都会育ちの私などの知らない農村の実情や牛の取引の仕

方などを彼から聞いたことを覚えている。

この時代私たちは危機感をかなり共有していたように思う。いわゆる「逆コース」と朝鮮戦争の時期であり、敗戦後やっと平和と自由を得たのに、再び戦争に巻き込まれるのを阻止しなければという思いが強かった。その背景には戦争体験があったと言えよう。

菊地君は同世代の作家、野坂昭如の『火垂るの墓』にはじまる戦争体験を題材にした諸作品を好み、評価し、解説も書いている。その中で自分の戦争体験と重ね合わせてこう述べている。「軍国主義少年として、他人の手で染めあげられ、敗戦となるや、荒野に放置されて、死から生への飛躍を自力でなしとげなければならなかった当時の十代なかばの少年群像にとって、その体質にまでなった天皇否定、国家否定の精神構造は、戦後三十年の『経済成長』などにまどわされることなく、まだまだ、『この怨み、はたさでおくものか』の余韻を十分にのこしているほど、執念ぶかいものである」（菊地昌典著『歴史と想像力』筑摩書房、1988年、所収。以下の引用も同書から）。

そしてその体験の底にあったのが「飢え」であり、「栄養失調」である。彼は言う。「私は、この『栄養失調』という言葉、万感の怨みをこめて、原稿に刻みつけるように書かざるをえない。その言葉を書きつらねながら、『栄養失調』を経験しないものに、この言葉の意味がわかるはずはないという絶望感に襲われさえする」。戦後も食うことが大事であり、食うことにこだわってきた。菊地君はどこかで、高等農林に行ったのは食えると思ったからだと書いているが、それが全部ではないにしても、動機のかなりの部分を占めていたかもしれないと思う。彼の場合、メシとは米の飯で

あり、パンやパスタなどはその中に入らない。他方その対極にあるのが、すいとんである。かなり長い年月、8月15日近くになるとすいとんを食おうと言っていた。あの頃を忘れないためにである。恐らく若い人たちにも押しつけて顰蹙をかったこともあったろう。

東大在学中に菊地君が学生運動に関わったことは、彼自身が書いているが、その実際の活動については私は殆ど知らない。

大学院を修了すると、彼は国立国会図書館調査立法考査局に就職した。この時代は彼の研究の蓄積と開花の時期であった。私はこの頃よく図書館に通い、その帰りに彼の所に寄って話しこんだ。その内容については今はあまり覚えていないが、当時社会主義、現代史、ソ連、中国など共通の話題には事欠かなかった。60年代に入ると、研究書として『ロシア農奴解放の研究』（1964年）を出版、他方63年スターリン批判についての論文を『中央公論』（1963年12月号）に発表し、論壇に登場した。この時だったと思うが、「中野好夫がベタボメだよ」と嬉しそうに語った笑顔が今でも思い浮かぶ。

60年代から70年代にかけて彼は多方面で目覚ましい活躍をした。スターリン問題をはじめとしてロシア現代史、国際共産主義運動史、中ソ対立、社会主義論、さらには中国の文化大革命に至るホットな難しい問題に正面から取り組んでいった。また歴史小説論や「歴史と文学」の分野にも手を広げた。ここでそれらについて論ずる余裕はないので、彼の研究の基礎にあった歴史の見方に簡単にふれるにとどめたい。

私は彼の歴史研究の基本的な視点は「民衆」にあったと思う。だがそれは、人民は常に正しく、平和愛好的であり、支配権力は

悪であるという、いわゆる「人民史観」とは全く違う。「民衆は、生活者として保守的であると同時に、また生活者であるがゆえに革命的になりうるという複雑な存在である。それは多分に自己閉鎖的な利己的集団であり、そのこと自体が、ナショナリズムに包摂され、国家イデオロギーへくみこまれたとき、簡単に排他的、狂信的な愛国主義者へと変貌する要素を内面に秘めている」と彼は言う。ここにも戦時の体験が生きていると言えよう。

菊地君はスターリン批判をはじめ、ソ連の社会主義には厳しかったが、中国に対しては甘かったとしばしば批判された。確かに一見そう見えるが、ソ連や中国に対する分析にも共通に民衆という視点が作用していたと思う。彼はソ連の中央集権的な官僚支配に対しては厳しい批判を展開したが、ロシア革命前のロシアの土着の変革の思想やナロードニキの活動などを積極的に掘り起こし、評価し、明治いらいの日本人の偏ったロシア観を批判してきた。他方中国については、長期間民衆の中で進められてきた闘争の結実として新中国の革命政権を高く評価し、毛沢東思想をマルクス主義としてよりも、中国にあった土着の民衆の変革の思想を受けつぎ、発展させたものと見ている。ただ文化大革命については私も彼の分析は批判されるべきだと考えるが、菊地君としては社会主義の下での民主主義という問題意識を発展させたかったのではないかと思っている。

(やまぎわ・あきら 二松学舎大学国際政治経済学部教授)

恩師難忘

馬 特立

尊敬する菊地先生が私たちを去って行かれてから、早くも1年が過ぎ去った。先生のやさしい笑顔、聞き取りにくい低い声、博愛に満ちた人間性。歳月の流逝にもかかわらず、そのすべては、心の奥に焼き付いて、忘れられないものである。

今、ペンを執りながら、菊地先生との出会い、日本留学、帰国後の挫折、来日研究、日本での就職……この12年間的一幕一幕が、まるで昨日の出来事のように、はっきりと目の前に浮かんでくる。

現在、世界的に新しい時代を迎えようとしている動きが激しくなっている。激変の時期においては、人間は不安を感じる。とにかく激変の環境に適応するため、皆「必死」状態になりがちであり、つい最も大事なことを忘れ、大切なものさえ捨ててしまう恐れがある。しかし、今こそ、「どんな時代でも、どこでも主体性を忘れず、心を捨てないように努力すること」という先生のご教示が響いているように聞こえてくる。これは、私にとって、先生自身の行動から学んだ「人間としての原点」となる。

振り返ってみると、「主体性」との出会いが、日本留学準備中の私へいろいろなアドバイスを下さった先生の手紙であった。字面どおりの意味は一応理解できたが、その言葉に潜めている内涵は、正直に言って、当時の私にはよく分からなかった。

来日間もない頃、学部主催の指導教官と留学生との集いの席で、ある先生の質問に対して、私は、他の留学生を気にして、正直には答えなかった。見透されたためか、「主体性」を持ちなさいと、

先生に厳しく正された。研究者の卵になる前に、まず精神的に独立する人間にならなければならない。他人に左右されずに、自分の考えを明示すると同時に、自分の行動にきちんと責任を持たなければならないと。

先生の言う「主体性」は、実に意味深い言葉である。中国ご訪問の際、「どうして私達の質問に対して、中国人の回答が皆同じですか」という先生の質問を思い出して、なるほどと思った。しっかりした主体性を持ち、流されないようにするためには、勇気が必要であるが、一人一人として「主体性」を持たなければ、社会全体の思考停止につながる恐れがあり、日本の軍国主義時代、中国の文革時代など、歴史的に証明されたあの怖さも深く考えさせられた。

外部の優れたものを受け入れる柔軟性と、自己の伝統や個性をともに大切にすれば、普遍性及び主体性の可能性が生まれる。中国の知識人、政府要人と意見交換やディスカッションをする際、先生は、壁を築かないことを常に心がけ、開かれた心を持つと共に、本質を見つめる目で真摯に向き合っていた。菊地先生の対中国批判が厳しかったことは度々あったが、菊地先生だから、「理解でき、感謝する」と、中国関係者が口を揃えて言う場面は印象深い。日本の良さを忘れず、日本人の優しい心を捨てず、日本人としての自分を見失わない自信と誇りを持ちながら、他民族の文化を尊重し、理解、吸収しているから、尊敬されていたのである。これこそ、日本を代表できる真の国際交流の使者ではないかと思う。

「自分に厳しく他人に寛容」の菊地先生は、外国人留学生に対して、日本人としての「慈愛」を最大限に与えた一人であった。

異国の地で生活する留学生にとっては、異文化や言語の壁との

葛藤など、それぞれの留学体験により、留学先に対するイメージも当然違ってくる。相互理解の前提は、まず相互の相違を認めることである。それから、好感を持ち始め、お互いに共通性、普遍性が見つかる。菊地先生は自分の留学体験を生かして、留学生達に実のある留学生活を送らせるようにするため、絶え間ぬ努力と忍耐力をもって留学生との交流に努めた。

私にとって、菊地先生は、学問上いつも厳しい指導教官であると同時に、生活上適切にアドバイスしてくれる「親」でもある。人間は、理想に描いた人物像より、矛盾に満ちた現実生活の中で、身近にすばらしい人間性を持つ人のほうがもっとも魅力的に感じて引かれるのではないか。人生を励ましてくれる導師と弟子との間に、教官だから威張ることなく、学問上先輩だから後輩を軽視することなく、常に平等、対等の態度で日常生活のささやかな事による「言伝身教」が菊地先生においては、十分に現れている。

「中華思想」の土壤に生まれ育てられた中国人留学生にとっては、無意識的に自分の血の中に流れている文化が一番優れていると思いがちで、「大中国対小日本」の思考からそう簡単に抜けられない一面は、否定できない。中国人留学生に対して、菊地先生は、あの両国間の不幸な時期に残された傷を如何に治すか、文化の相互尊重理解、冷静思考の大事さを如何に分かってもらえるかについて、常に現実社会との関わりの中で考え、自ら行動で実践してきた。人間は理想を持っていなければ、生きる意味がない、常に新しい社会像を求めて行動しなければ実現できないと、口癖のように言った菊地先生こそ、真の知識人であり、正真正銘のヒューマニストであった。

一人の人間として、先生の一生は、素晴らしい人生でした。一

人としてのエネルギーが限られているし、また、「驚天動地」の業績がないと言われるかもしれない。しかし、平凡が偉大さを育むと言われるごとく、限られたエネルギーからの影響が、無限なものである。その影響力は、残された人間にとって永久な記憶となるばかりでなく、精神向上の原動力にもなる。

指導教官を学問的に評価する能力も、その資格もないが、かつての弟子の一人として、この追悼の小文を通じて、菊地先生の人間性の素晴らしさをより多くの人に伝えたい。決して明るいとは言えない世の中に、菊地先生のような人が一人でも増えれば、と切望すると同時に、菊地先生のような人になりたい。先生のように、人のため、社会のため、真の日中友好のために、ご教示に基づき、積極的な行動をもって、「知日派」を目指し、微力ながら努力しなければならぬと、心の中に誓う。

(Ma Teli アメリカンファミリー生命保険会社)

銀杏が熟れる頃の思い出

張 競

東京に到着した翌日、すぐ菊地先生に電話した。講義や執筆でご多忙であったにもかかわらず、先生はその日のうちに会ってくださった。

5月の東京。さわやかな風が吹いていた。夕方の池袋駅はかなり混雑していて、黄昏のなかで人々がせわしく行き交っていた。改札口を出ると、先生はいつもの笑顔ですでに待っていた。

「東京の物価が高くて、たいへんでしょう。なにか困ることがあ

たら、いつでも相談に来なさい」。先生の励ましは14年経ったいまも忘れられない。

菊地先生に初めてお目にかかったのは、先生が上海に訪れたときであった。勤務先の華東師範大学には「ソ連・東欧研究所」があり、その招きで、先生は連続講演を行うことになった。わたしは当時学部で助手をしており、本来、「ソ連・東欧研究所」の仕事と直接的なかわりを持っていなかった。たまたま菊地先生の講演会に出て、その内容に惹きつけられてしまった。演題は忘れたが、たしかに中国の社会主義を批判する内容であった。1980年代の中頃には、言論の自由はまだきびしく制限されており、とくに社会主義を批判するのがタブーであった。

講演のなかで先生は論拠を挙げながら、中国はほんとうの社会主義ではなく、このままでは将来は危うくなる、と指摘した。それまで中国政治に対し、これほど率直な批判を聞いたことがない。先生の緻密な分析と鋭い批判に驚きながら、目から鱗が落ちる思いをした。わたしだけではない。聴衆たちもみな先生の話に魅せられ、講演中に何度も割れるような拍手が起こった。

講演会のあと、先生は若い教員と話したいと希望されたので、わたしもその一人として加わった。講演のときと打って変わって、先生はわかりやすい言葉で、ときにはユーモアをまじえながらさまざまなことについて縦横無尽に語った。われわれのような若手教員の生活についても興味があったようで、専門資料の所蔵状況や研究条件から住宅、給与にいたるまで幅広いことについて質問した。

自由市場を見たいとのご要望があったので、2、3人の同僚とともに案内することにした。中国の朝は早い。しかし先生は早起き

をまったく苦しめなかった。早朝から2、3時間も歩き回り、われわれ若者よりも元気であった。屋台の品物を手にとって価格は供給状況について熱心に聞き、とくに国営の八百屋との違いや競争についてはつよい関心を示した。

日本に留学に来たのが、それよりわずか2、3カ月後のことであった。留学先の大学には留学生担当の専門職員がいたが、スタッフが少ない上、仕事が多く、こまごまとした個人的なことについてとても相談できる雰囲気ではなかった。ましてや日本に来てまもない頃、互いに名前も顔も知らなかった。その間、菊地先生は最大の頼りであった。

わたしは最初本郷に籍をおいたが、所属する研究科の雰囲気にはなかなかなじまなかった。銀杏が実る頃になると、思い切って先生に相談することにした。研究室の前まで来て、学生たちがひっきりなしにたずねてくるのを見ると、おもわず躊躇した。わたしの姿が見えたのか、先生から声かけられた。専門が違うにもかかわらず、親切にアドバイスをし、大学院の仕組みも丁寧に説明した。わたしがかねてから比較文学を勉強したいことを聞いて、さっそく比較文学専攻の教授を紹介してくださった。

修士課程に入ってからもしばしば8号館3階の研究室を訪ねたが、先生は一度もいやな顔をしたことはない。それどころか、ときどき食事に誘ってくださった。池袋には先生がお気に入りのギョウザ店があり、来日早々特大のジャンボギョウザをご馳走になった。吉祥寺のおいしいラーメン屋にもつれて行っていただいた。ある日、先生の研究室に遊びに行くと、「最近はや色が悪いようだね、栄養のあるものを食べなくちゃ」と言って、大学近くの中華料理屋でスタミナ定食をおごってくださった。

先生が東大を退官された後、わたしは学位論文の執筆に追われ、書信だけの連絡となった。その後、少し時間的な余裕ができたが、先生は学長になられ、仕事をご多忙であることを知って、しばらくお邪魔するのを遠慮した。ときおり新聞や知人からご活躍ぶりを聞き、いずれはおうかがいする機会があるだろうと思っていた。それだけに新聞で訃報を見たとき、本当に晴天の霹靂であった。

先日は久しぶりに駒場を訪れた。新しいビルが建てられ、駒場寮の取り壊しも着々と進められている。ここ数年、キャンパスは様変わりした。先生がいつも通っていた道を歩くと、万感胸に迫るものがあった。研究室の窓を見上げると、ふと思った。これから一層勉強をし、一生懸命仕事をする、これが先生への恩返しではないか、と。

8号館前の通りには銀杏の並木は依然として青々と生い茂っており、名もない草はそよ風のなかで揺れている。近くの住民が子供をつれて遊びに来ており、幼い子供の無邪気な笑い声は夕暮れのキャンパスでこだましていた。

駒場にはまた秋が訪れようとしている。

(Zhang Jing 明治大学法学部助教授)